

学員会会長に就任

芳井敬一 大和ハウス工業会長／CEO

(1981年文学部卒)



実は私、
中大出身で

2021

ラグビー部で培った「覚悟」 「僕は中央大学に育てて もらった」

インタビュー動画は
こちらからご覧になれます



さまざまな分野で力を発揮し、活躍している中央大学出身の方々の声や思いを紹介し、現役学生や卒業生にエールを届けたい。実際に社会人として未知の人と出会い、言葉を交わす中で「あなたも中大出身ですか」と、同窓の縁に驚き、深く思いを致し、感謝する機会^{かいこう}は少なくないという。邂逅は大切な宝物だ。「実は私、中大出身で」の第1回では、卒業生で組織する中央大学学員会会長に2025年5月に就任した、芳井敬一・大和ハウス工業株式会社代表取締役会長／CEO (1981年文学部卒) に、同社東京本社 (東京都千代田区飯田橋) で話を伺った。

(聞き手「HAKUMON Chuo」学生記者、倉塚凜々子=国際経営4、松岡響紀=経済2)

「試合に出られなければ辞める」 胸に秘めて猛練習し活躍

《100メートル11秒5の俊足ウイングとしてラグビー部に在籍した中大時代、芳井敬一氏はどのような学生生活を送っていたのだろうか。芳井氏が大学3年生のとき、キャンパスの多摩移転が完了した。ラグビーや勉強のことなど印象深い思い出を語ってもらった》

芳井敬一氏 ラグビーを一生懸命やってきて、セレクションで大学に入学、最初はグラウンドがあった東京都練馬区に住んでいて、1年生の秋シーズンに南平の寮（東京都日野市）に入ったんです。寮から校舎までのバスが全くなくて、ずっと大学まで歩いていたんですよ。きつかったわあ（笑い）。片道40分ぐらい、山を上って下りて、野球場があってトンネルを抜けて帰る。あれが一番の思い出ですね。同級生が10人ぐらい脱走して部を辞めてしまい、残ったのは8人。その中でも、びっくりしたのは寮がすごくきれいだったこと。シャワーも完備されていて「新寮はいいな」と思いました。2年生からバスも出ましたしね。2年生のときの学祭にはサザンオールスターズが来て、デビュー曲の「勝手にシンドバッド」を4回くらい演奏してくれました。体育会の僕らは「警備係」として参加した思い出があります。ラグビーのグラウンドはすべて芝で、ナイター設備（夜間照明）もついていました。今のラグビーは芝でプレーするのが当たり前ですが、当時としては画期的でした。

——ラグビーの練習や試合を通じて学んだことは何ですか

芳井氏 一番に学んだのは「覚悟」。ラグビー雑誌に期待されるプレイヤーとして書かれても、1、2年生のときはけがでゲームに出られない。「3年生で出られなかったら大学を辞める」。そう決めると、もう練習しかない。恐ろしいほどに練習しました。「辞める覚悟」がすべてをやらせてくれた。そうすると勝手にチャンスが来る。チャンスが来たときに、きっちり練習を積んできたから神が降りてくる。神が降りてきたら活躍させてくれる。活躍すると次のゲームにも出られる。辞める覚悟ができたことがすごく良かったんです。

会社でも社長になりたいと言われて、「なりたい」だけの答えではだめで、「会社にどうやって貢献できるのか」が僕は大事だと思います。学生時代は中央大学のユニフォームを着て、胸に中央のマークをつけて、プレーするのが自分の貢献で、目指すのはフィールド、秩父宮（ラグビー場）に立ちたいと思ってきましたし、そのためにやってきたことが覚悟によってつながりました。4年生のときは多少けがもしましたが、大学の先輩が在籍していた神戸製鋼所のグループ会社、神鋼海運（現神鋼物流）に入社し、ラグビーを続けました。

——大学時代を通じての経験で、仕事に役立ったと思えることはありますか

芳井氏 寮生活で「続ける」ということをすごく学んだ



中央大学ラグビー部時代（上下とも中央が芳井氏）

かな。続けることの大事さ。「継続は力なり」です。そこでしっかりと続けられたことが今につながっています。僕はこの大学に育ててもらったと思っています。教授の方々に恵まれた。なかなか単位を取れなかったんだけど、当時は校地移転をめぐり、大学に混乱が生じて、試験がすべてレポート提出に変わっていくんです。レポートの出来が良くなかったら、「これは書き直さないと無理」と言ってくれる教授の方々もいて、そういうことに恵まれていました。レポートでなかったら、4年で卒業できていなかったかもしれません。

人生を変えた交通事故 あえて探した「きつい会社」

《ラグビーを引退後、仕事に力を注いでいた30歳のとき、交通事故に遭い、ビジネスマンとしての人生が変わった。海外勤務を希望し、短期の語学留学などを経て、米国でのプロジェクトメンバーに決まった矢先の事故だった。8カ月の入院で海外赴任の夢は絶たれてしまうが、自分自身と向き合い、新たな仕事を探すことを決意する》

芳井氏 海外赴任のキャンセルが決まり自分は間違っていたんじゃないかと思うようになっていたんです。どうしてアメリカを目指しているんだろう。やりたいことがアメリカにあるわけではなくて、アメリカで仕事をすること、英語でしゃべることがかっこいいと思っている。かっこよさを求めたから、きっと罰が当たったんだろう。かっこいいという仕事を目指してる自分がだめだった。

けがが快復したら、それまで8カ月近く休ませてもらい、迷惑をかけた会社でしっかりと1年間働き、次のフィールドを探す。でもそれは決して海外ではないと。

——次のフィールドに大和ハウス工業を選ばれた理由を教えてください

芳井氏 僕は適性検査を受けると「絶対営業に向く」と出るんですが、両親は「営業には行くな」と反対で、それまでも全然違う仕事をしてきました。でも、検査の結果を信じて、営業のきついといわれる会社を探して転職しました。30歳を超えて、きついところに行って、どこまで通用するのかと思ったとき、「自分は新入社員と同じ。だから掃除も何でもする」と決めた。これも体育会にいたからこそできました。遅れてきたルーキーとして、そうしないと自分の居場所が作れないと思っていました。でも、大和ハウス工業は社員がどこの大学の出身か全く興味が無い、高校卒業か大学卒か、中途採用かどうか関係ない。僕は中途採用の社長でしたが、樋口武男・前会長も、次の大友浩嗣社長も定期採用ではありませんでした。偶然にも入社させてもらった会社があまりそういうことにこだわらなかったの、僕は成長できたのかもしれない。

——その後、経営を預かる立場で海外で働く機会が巡ってきたときは、どのように感じましたか

芳井氏 金沢支店長だった2010年に突然、海外赴任を言われました。30歳で海外勤務を追いかけたときはつかめなかったんだよね。つかめなかったのは自分の問題。でも、今度は追いかけていなかった。追いかけていなくても、自分という人間に海外をやらせてみたいと思ってくれた。今度は理由がある。前は「カッコいいから行く」と。僕に与えられたミッションがあって、「だから海外に行け」と言われたと受け止めました。

小学校の先生が目標 「貧乏人の坊ちゃん」の幼少期

《芳井氏は教育者になることを目指していた。中大入学時には教育学以外を学ぶなら、ほかの大学に進むつもりだったという。卒業後、教育者の道を選びはしなかったが、今は大和ハウス工業で後輩たちの人財育成に携わっている》

芳井氏 学校の先生にはなれなかったけれど、結果的にこの会社で社員を教育している。それは、大和ハウス工業の創業者が残した「事業を通じて人を育てること」という社是を大事にしているからです。目指していたのは小学校の先生だったのに、それを追いかけてない自分に、教育というチャンスがあるのは不思議に思います。けれど、何がやりたかったかという元の自分のフィールドに戻れるというのはうれしいし、元気が出て、生き生きしています。樋口前会長から将来の売り上げ目標を言われたときには、「僕の時代にはその数字は無理ですが、一つだけ約束しておきます。人だけ残しておきますと。この人たちなら可能性があるとメンバーをきちんと教育しておきます」と

答えました。

社員には、「通らなあかん道」を通らせています。逃げない。逃げると、結局また逃げないといけない。まっすぐに決着をつけることがすべてだと思っていますね。この会社はまっすぐ動くんだと。これはラグビーの教えで、ラグビーは、まっすぐ突っ込んでくる相手へのディフェンスでは、タックルするのに躊躇する、怖い。でも、斜めに逃げていく相手は、ばっちり捕まえられる。斜めに逃げたら捕まる。まっすぐは躊躇が生まれる。やっぱり、まっすぐが一番大事なんです。

——樋口前会長から「うまく育ててもらったことを両親に感謝しないとイケない」と言葉をかけられたことを伝え聞いたお母さまが号泣されたといいました

芳井氏 僕は4番目の子供で、上のきょうだい3人が亡くなっています。生まれてすぐ亡くなったお姉さんもいたし、死産だった子もいた。お金のあるなしは別にして、やっと生まれた子なんです。母親は「貧乏人の坊ちゃん」とよく言っていました。「お金はないけれど、坊ちゃんとして育てて失敗した」とかよく言われるんですけど（笑い）、母親と父親は常にしつづけに厳しかった。近所の人に対する態度や挨拶などをずっと教えられてきたわけです。樋口前会長はそういうことをおっしゃったんだと思いますね。「きちんとしつけられて、ええ育てられ方をして両親に感謝せよ」と。母親はそれがぐっときたんだと思いますよ。僕が社長になったことを母親は「うれしさ半分、寂しさ半分」と言っていました。おそらく「遠くへ行ったな、離れたな」と思ったんだと思います。親子だから深くは聞かないですけど、その言葉はやっぱり胸に染みしました。

「今だけ、ここだけ、あなたにだけ」 直接の会話で“距離”を詰める

——学生や若者に対して、ここは直したほうがいい、改善したほうがいいのかと思う点がありますか



神戸支店在籍時、台湾出張の際の一枚(左から2人目が芳井氏)

芳井氏 今、皆さんは「いつでも、どこでも、誰にでも」の世界を見ていると思います。これを調べたいと思えば勝手に情報が出てくる。それが嘘か本当かはわからない。社員にも同じことを言っていますが、「いつでも、どこでも、誰にでも」ではなく、「今だけ、ここだけ、あなたにだけ」の話を大事にしたほうがいい。ということは、会話しかない。それを僕は今やり続けています。どうするかというと、このインタビューのあと、ある社長のところに行くけれど、僕はいつもたった一人で行く。3人で行くと、30分を10分ずつとってしまう。1人で30分を独占したいんです。自分を売り込みたい。その人の口から話を聞きたい。「今だけ、ここだけ、あなたにだけ」の情報をいかにキャッチするかというのは、若いうちの今からやっておいたほうがいい。友達に会ってしゃべる。違う人と会ってしゃべる。情報はいろいろな人から入ってくる。

「ここまで来たあなただけに言うてあげるわ」という情報が大事。営業を担当していると、仕事をあげるという情報ではなく、「頑張っても無理や。もう決まってんねん。だから無理をするな」と言ってくれる情報が宝物。なぜかという、社内のメンバーを動かさないで済むから。それは距離を詰めないと教えてくれない。決して社会人だからできるというのではなく、気持ち次第です。人と会えばいいし、興味のある人と会えばいい。相手が距離を詰めてくるのではなく、自分から行く。自分から詰める。

——ご自身の一番の支えになっている存在は何でしょうか

芳井氏 一番の支え、存在はやっぱり後輩たちかな。ずっと一緒に働いてもらっている方たち。トラブルとかいろいろ起きたときも後輩たちが信じてついてきてくれる、おそらく「逃げていない」と読んでくれたんだろうと思いますよ。こちらはだめだったら辞める覚悟。覚悟というのはやっぱり大事で、「安物の覚悟」というものがあるかわからないけれど、見透かされると思いますね。僕はいつも「過去は変えられない」と、よく言うんですよ。「前向き人生、損はなし」と。それは大事ですよ。

《芳井氏は、中大の先輩（法学部卒）である御手洗富士夫・キヤノン会長兼社長との間柄を示すエピソードとともに、母校への熱い思いも語ってくれた》

芳井氏 中央大学卒業でよかったなと思うことを一つ挙げると、キヤノンの御手洗富士夫さんというすごい経営者がいて、会うと（芳井氏のことを）覚えてくれるんですが、最初は「距離」を詰められなかったんですよ。でも、大学の後輩ということが大きな壁を破ってくれた。ちょっと厚かましく、一人で会いに行っても、後輩だから会ってくれる。ある会で御手洗先輩に挨拶に行くと、「彼はね、芳井君といってね、僕の大学の後輩なんです。かわいがっているんですよ」と、横におられた小泉純一郎元首相に紹介してくれて…。その言葉がうれしかった。「大和ハウス工業」じゃなくて、「大学の後輩」というあの瞬間がね。大学が一緒ということが、どれだけ距離を詰めてくれるか。中大は



芳井敬一 大和ハウス工業会長／CEO

よしい・けいいち。1958年大阪府生まれ。高校でラグビーを始め、中央大学文学部哲学科教育学専攻に入学後もラグビー部で活躍した。ラグビー部当時の身長は171センチ、体重は68キロだった。1981年に中大卒業後、神戸製鋼所のグループ会社、神鋼海運（現神鋼物流）に入社し、社会人の強豪である神鋼ラグビー部に所属した。1990年に大和ハウス工業株式会社に入社。2006年姫路支店長、2008年金沢支店長、2010年執行役員、2011年取締役上席執行役員、2013年取締役常務執行役員、2016年取締役専務執行役員などを歴任し、2017年に代表取締役社長、2025年に現在の代表取締役会長／CEOに就任した。

趣味は映画、演劇の鑑賞。笑える映画が好きで、泣くような映画は「絶対に見ない」。ホラー系も苦手。三谷幸喜監督の作品がお気に入り、劇団☆新感線の舞台も好きだという。

そういうことが、たくさん起きる大学だと思いますよ。

中央大学を出てよかったなと思うことはいっぱいあります。そのときに大学に感謝をして、僕たちの後輩たち、あなたたち（現役生）の後輩たちが、また中大で頑張れるようにと思ったときに、あなたたちの周りの人にぜひ、「中央大学を受験したらどうですか」と声をかけてほしい。「中大を受けなよ」「中大っていいよ」とアピールしてほしい。出身の関西にいるときはどういう大学がよくわからなかったけれど、入ったらすごくよかってん（笑い）。大学に元気が出てくると、いろいろなこともできる。中大を出て「得した」と思う瞬間に、そのことをいろいろな人に伝えてほしい。先ほどの御手洗さんの話もそうだし、ぜひ、そういう行動をしてほしいなと思っています。

あと、大学ラグビー部を応援してください。僕は中央大学ラグビー部のOB会長なんです。どうしても今年、（関東大学リーグ戦の）1部に復帰したいので、ぜひお願いします（笑い）。